

飼料用米の収益向上のための栽培体系の確立

甲賀農業普及指導センター

【普及活動のねらい・対象】

甲賀地域では「生産目標」に基づいた「主食用米」を栽培した上で、生産調整の主力として麦・大豆栽培を推進していますが、中山間地域の湿田ほ場では麦・大豆の反収が低く、収益性が劣るなどの理由から年々栽培面積が減少しています。一方で、水田の活用として「飼料用米」の栽培が増加しています。

「飼料用米」の取組は、一括管理方式と区分管理方式がありますが、特に区分管理方式での取組が約 27ha あるものの、地域の標準的な収量を満たせていない状況です。そこで、普及指導センターでは、飼料用米生産者（一括管理方式取組）を対象に収量向上に向けた支援を行いました。

【普及活動の内容】

平成 30 年産から、これまでの品種と比べ収量性が高いと認められた多収専用品種である「吟おうみ」が新たに導入されました。そこで、JA こうかとの連携により栽培前の研修会を開催し、「吟おうみ」の栽培特性や、移植時期の早期化、栽植密度の向上について助言しました。

本年は、モデル生産者を設け、生育調査ほを設置し、生育調査結果をもとに施肥や雑草対策など収量向上に向け支援するとともに個々の生産者には、育苗、移植作業、施肥（穂肥・実肥）および刈取時期に関して巡回指導および広報紙の配布を通じて支援しました。



写真 飼料用米の収穫作業

【普及活動の成果】

各生産者では、概ね 5 月末までに田植作業が実施され、栽植密度も坪当たり 50 株以上で移植されるなど、収量の向上に向けた栽培が実践されました。

しかしながら、夏期の異常高温や度重なる台風および登熟期の日照不足の影響などにより、飼料用米においても減収傾向でした。

甲賀地域に多い中山間地域では、特に条件不利の農地において荒廃する水田が増加する傾向であり、その抑制をはかる取組としても「飼料用米」の活用を今後も推進します。

◎対象者の意見

度重なる台風を招いても倒伏しなかった。次年度はさらに増収をはかりたい（甲賀市水口町 I 法人理事）。